

第3章 検出された遺構と遺物

第1節 貝層

山野貝塚の主要貝層は、西貝層、東貝層、北貝層からなり、その他主要貝層範囲の外側に地点貝層が存在する。これまで、第1、2、7次調査において貝層の調査を実施した。第1次調査は東貝層の中央部分の調査で、本遺跡の中で最も大規模に貝層を調査した事例となる。第2次調査では西貝層に3箇所、東貝層に2箇所のトレンチを設定し調査を行った。第7次調査は第2次調査の10トレンチの再調査で、新たに貝層サンプルを採取するとともに貝層断面の剥ぎ取りも行った。また、平成25年度には主要貝層範囲外で検出された地点貝層について状況を確認した。

本節では貝層ごとに調査内容を記述することとする。

1 東貝層

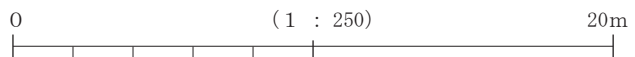
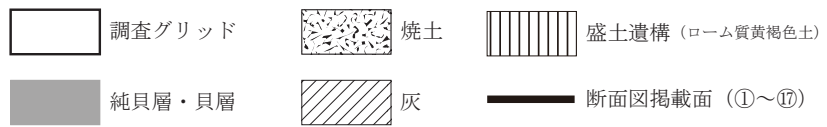
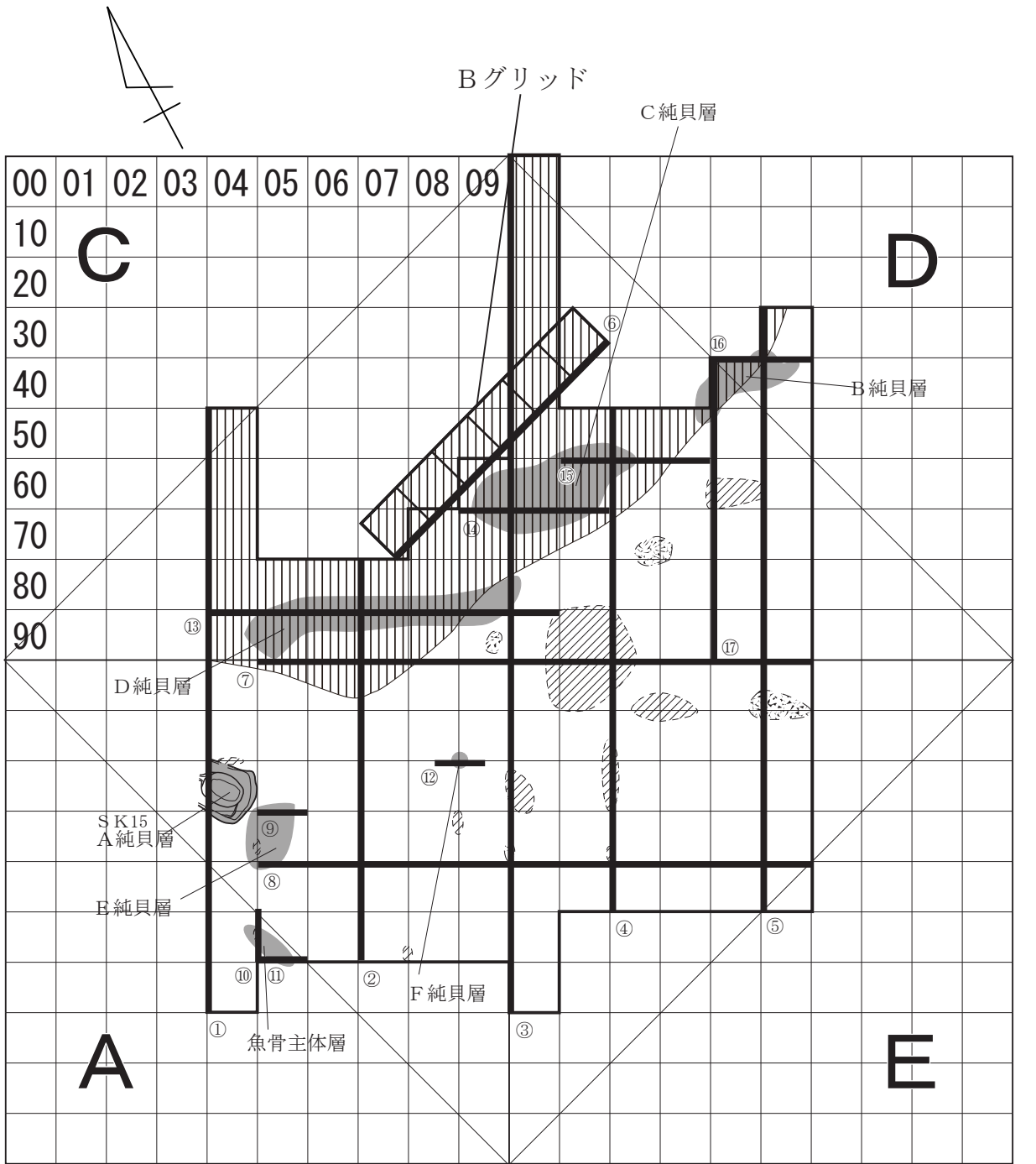
(1) 第1次調査範囲 (第9～38図)

概要 (第9図)

第1次調査の調査範囲については、当時の調査図面に座標の記載がないためその位置を確定することは困難であった。しかし、原図の全体図には現在も確認できる南東―北西方向の赤道の位置が記載されており、さら第2次調査時のボーリング調査による貝層堆積範囲より、貝層の途切れる範囲が第1次調査範囲の西側端部に相当すると判断できた。このことから第1次調査範囲は第6図グリッド配置図におけるM15・16、N15・16グリッドの範囲にほぼ収まり、東貝層の中央部の北側から緩やかに入り込む谷の谷頭から貝層の最頂部に相当し、中央窪地にはかからない範囲とした。

調査はまず調査範囲内を4等分する基準杭を打設した後、斜面に並行する試掘坑⑥トレンチを設定し調査を進めた。その後、基準杭に沿って①、③、⑤、⑦トレンチを設定し、③トレンチと⑦トレンチの交点を中心に20×20mの大グリッド(西側をAグリッド、北側をCグリッド、東側をDグリッド、南側をEグリッド)を設定し、その中を2×2mの小グリッドに区画し調査を実施した。なお、当初調査を行った⑥トレンチをBグリッドと称し、同じく2×2mに区分して調査を行った。調査に際しては、ほぼすべてのグリッドに対して4面のセクション図を作成している。各グリッドの調査終了時の底面は様々であり、遺構検出が容易なソフトローム漸移層及びソフトローム層まで達していないグリッドが多数存在する。そのため、後述するように、検出された遺構がSK15の1基のみとなっている。なお、土層中から焼土や灰が数箇所確認されている。これらについては平面分布の原図が不明であり、第1次調査報告書に掲載されたものと土層断面で検出されたものをつなぎ合わせて範囲を推定した。これら焼土、灰の存在から、本調査範囲内にはローム層まで掘り込まれない遺構が複数存在したものと推測される。

出土遺物は、単独、一括に関わらず、グリッドの層位ごとに「遺物取り上げ番号」が付番され取上げられたようである。整理作業時においてはこの番号を元にグリッド間の層序関係及び遺物の出土層位について判断し、さらにこの番号ごとに出土遺物の分類、集計等を行った。報告書掲載に当たっては、第1次調査報告書に準拠し、グリッドを連結した層位を「報告層位」として層番号を付番している。ただし、報告書に掲載しなかった断面についてはすべてを連結することが困難であったため、「報告層位」は付番していない。各



第9図 第1次調査全体図

グリッドの層位ごとに出土遺物を計測し、層位との関係から時期の区分として、0、I-1、I-2、II、III、IV-1、IV-2、V段階の8段階を設定した。

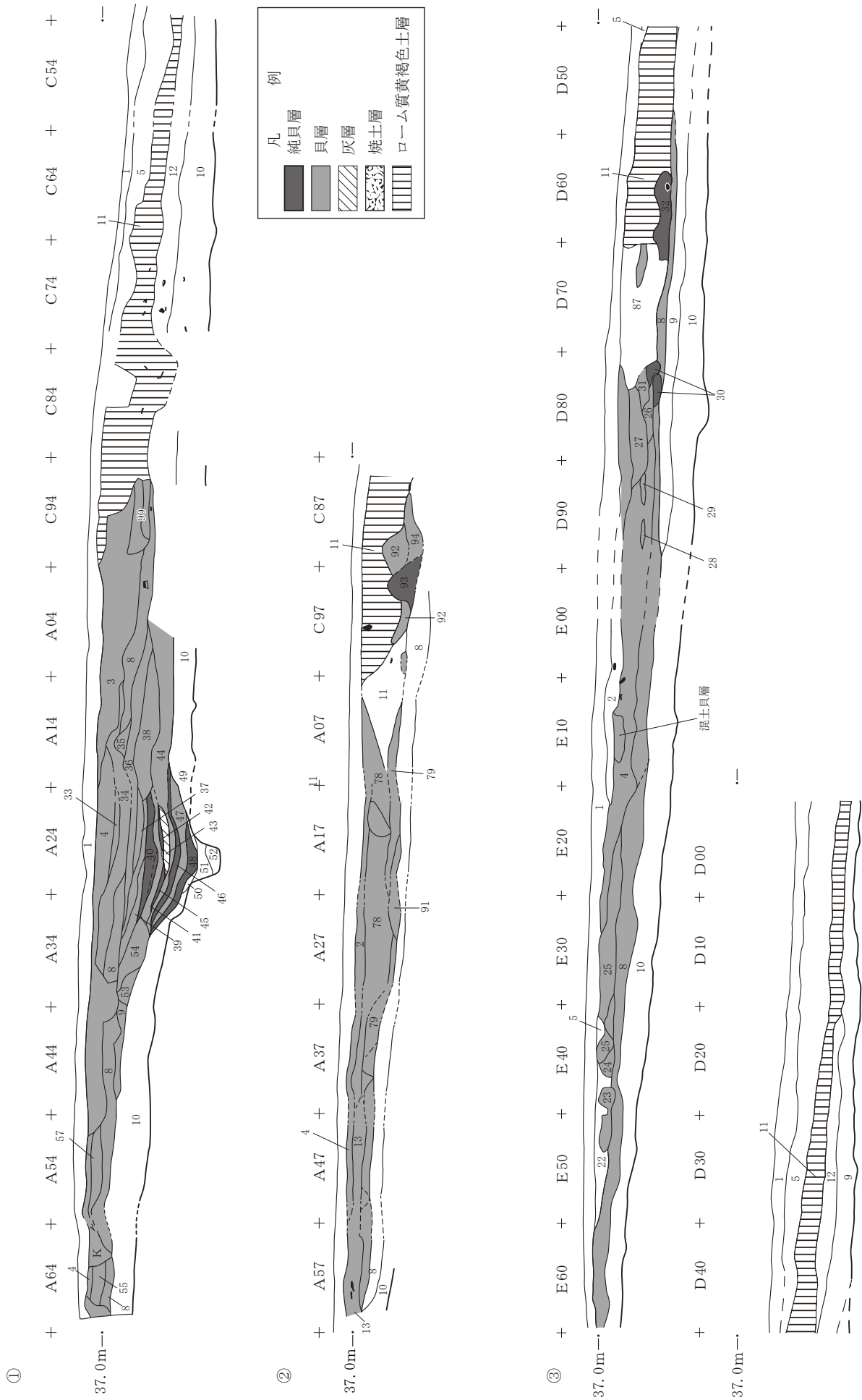
貝層及び土層の層序（第9～12図）

全面的に作成されたセクション図のうち、貝層と斜面の傾斜にほぼ直行する南西-北東方向のセクション図を5本（①～⑤）、緩斜面に平行するセクション図を1本（⑥）、貝層と斜面にほぼ平行する北西-南東方向のセクション図を2本（⑦、⑧）の他、純貝層を含む個別のセクション図を9本（⑨～⑰）掲載する。調査時の貝層の表記について、純貝層は比較的どのセクション図においても統一して表現されていたが、混土貝層、混貝土層は、隣接する同一層位でもその表記が異なっている箇所がみられた。そのため、貝層については純貝層と貝層（混貝土層と混土貝層を含む層）として凡例を区分している。

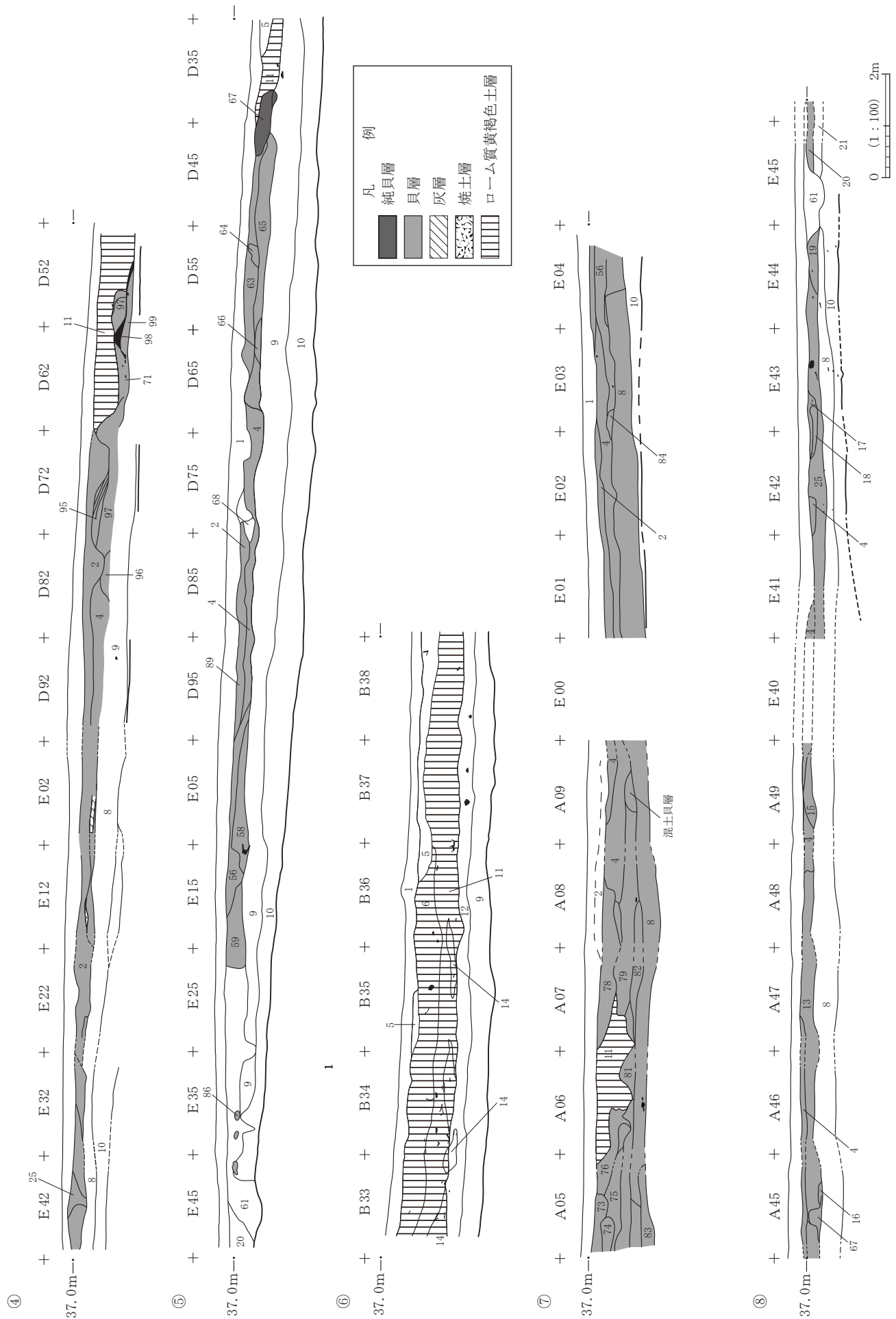
前述したように、調査範囲は北側から入り込む緩斜面の谷頭に位置しており、南～北に向かって傾斜している。最も長く設定した③セクション図において、地表面の高低差は1.3 m、地山ローム面の高低差は2.4 mを測る。地山ローム面の傾斜は調査範囲南西から北東へ16 mほどの範囲は緩やかに傾斜し続けるが、それより北東側になると傾斜がほとんどなくなり平坦に近くなる。

基本的な土層の堆積は、最下層に貝層を含まない黒色土（10層）が堆積し、その上部に同じく貝層を含まない暗褐色土（9層）が堆積する。③、⑥セクション図をみると、北東側の斜面部では9層がローム直上の土層となる。両土層からは堀之内1式土器が少量出土する。9層上には暗褐色混貝土（8層）が北東側斜面部を除き調査範囲全体に堆積する。本層は場所により貝の含有量に多寡が認められ、堀之内1式土器が多量に出土する。これら8～10層は調査範囲の下層の大部分に堆積する土層である。ただし、8層と9層が、東西南北に交差する断面図で異なる場合も存在する。なお、A 24グリッドで検出されたSK 15は、9、10層を掘り込み8層に被覆されることから、本遺跡に面的に貝層が形成される以前に掘り込まれたことになる。ただし、出土した土器に時期差がないことから、SK 15が機能していた時期とその後の貝層の堆積についてはさほど時間差がないものと考えられる。SK 15については本章第2節で述べる。

8層以上には貝層が堆積するが、南側の標高が高い部分は貝層の厚さが0.15～0.3 mと薄いのに対し、北側の斜面部においては0.4～1.0 mと厚く堆積する。特に①、②、③セクション図をみるとわかるように北西側で堆積が厚くなる。純貝層の分布状況をみると、Aグリッドを中心とする南西側では8層直上に小規模な純貝層が散在する傾向にあるのに対し、北側のC、Dグリッドでは谷頭の9層直上に比較的まとまって堆積する。⑨セクション図はA 35グリッド北壁断面で、103層はハマグリ、シオフキが主体となり、イボキサゴ、ツメタガイが混在する純貝層（E）である。⑩、⑪セクション図はA 55グリッド西、北壁断面で、108層は魚骨を主体とし破碎貝が混入する。⑫セクション図はA 28、29グリッド北壁断面で、114層はマテガイの純貝層（F）である。第1次調査範囲では数箇所マテガイの集中が認められるが、114層が最もマテガイが集中する純貝層である。以上のAグリッドの純貝層からは堀之内1式土器が主体的に出土する。②セクション図の北側C 87、97グリッドと⑬セクション図のC 94～C 99グリッドの93層は長軸方向北西-南東に帯状に堆積する純貝層（D）でハマグリ、ツメタガイ、マテガイを主体とする。隣接する92、94層はハマグリ、シオフキ主体の混貝土層、混土貝層で、93層の純貝層を含め加曽利B式～後期安行式が主体的に出土する。③セクション図の北側D 60グリッドの8層上面及び⑭、⑮セクション図の最下層に堆積する32層は、ハマグリ、サルボウ、ツメタガイ、イボキサゴ、アカニシ、マテガイを主体とし、獣骨類も多く含む純貝層（C）で、長軸が東-西方向で、長軸6.5 m、短軸2.5 mの範囲に楕円形に分布する。加曽利B



第10図 第1次調査断面図 (1)



第11図 第1次調査断面図(2)

式～後期安行式期の土器が主体的に出土するが、後期安行式が多い傾向にある。⑤セクション図北側D 45、D 35 グリッドと⑩セクション図D 44、D 45 グリッド、⑪セクション図北側D 44 グリッドの9層直上の67層は、ハマグリ主体の純貝層（B）で長軸が東－西方向で、長軸1.8 m、短軸0.8 mの範囲に分布する。加曾利B式期の土器が主体的に出土する。

調査範囲北側の斜面部では、C 94～D 35 グリッドにかけて前述のB～D純貝層に沿いながら、これらの純貝層を被覆する形で11層のローム粒子を含有する褐色土層とその下部に部分的に淡黒色を呈する12層が斜面側に堆積する。これらは、人為的に移動された土層と考えられる。この11、12層については「盛土遺構」として本章第2節5で記述する。また、11層上には黒色土に近い暗褐色土層（5層）が堆積し、11、12層と同様に堀之内1式～晩期安行式期までの土器を包含するが、出土量は著しく少ない。

出土遺物と層序の関係（第13～17図）

斜面方向に設定した①～⑤セクション図にかかるグリッドにおいて、層位ごとの出土土器の比率をグラフ化したものが第13～15図である。1層は基本的には表土層（耕作土）であり、各セクション図の最上層に堆積する層である。1層以下、グラフの上側の層は調査範囲の北側の層、すなわち斜面側の層で、グラフの下側の層は調査範囲の南側の層、すなわち中央窪地側の層となる。8、9、10層は調査範囲の下層に全体的に堆積している。全体的な土器の出土傾向をみると、調査区北側の斜面側の層からは後期中葉から晩期の土器が多く出土する傾向にある一方、調査区南側の層からは堀之内1式を主体とする後期前葉の土器が大半を占めるようになる。これらの土器の出土状況と層序の関係から、第1章第2節2のとおり、以下の8段階の時期設定をした。

0段階 中期末葉～後期初頭

明確に対応する土層はないが、第1次調査範囲において土器出土量が増え始める時期である。隣接する伊丹山遺跡に集落が形成されはじめる時期である。

I－1段階 後期前葉（貝層形成以前）

貝層形成以前の土層。上層を中心に堀之内1式土器を含む。調査範囲全面の最下層に堆積する9、10層で、下層からローム層との漸移層、旧表土、遺物包含層に分かれるものと考えられる。

I－2段階 後期前葉（貝層形成以後）

後期前葉の貝層。全体的に堀之内1式期を主体とするが、Eグリッドの東側では堀之内2式土器が多く出土する。8層の混貝土層、混土貝層が主体で、一部に小規模な純貝層を形成する。イボキサゴ、ハマグリを主体とし、一部マテガイが集中する層も認められる。調査範囲南西側の緩斜面の上部に堆積する。SK 15は同段階の土坑ととらえる。

II段階 後期前葉～中葉

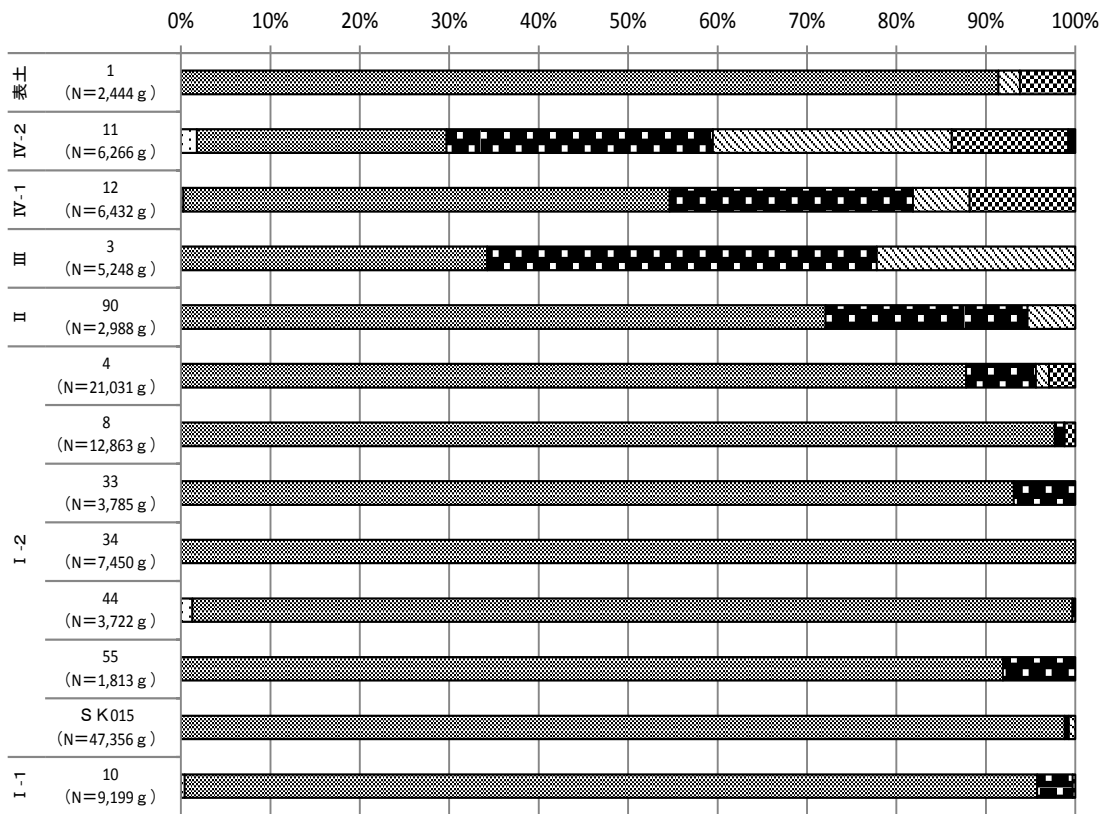
後期前葉～中葉の貝層。堀之内1式～加曾利B式期が混在し、主体となる時期が不明確。混貝土層、混土貝層が主体。III段階の下層に部分的に認められる。

III段階 後期中葉～後葉

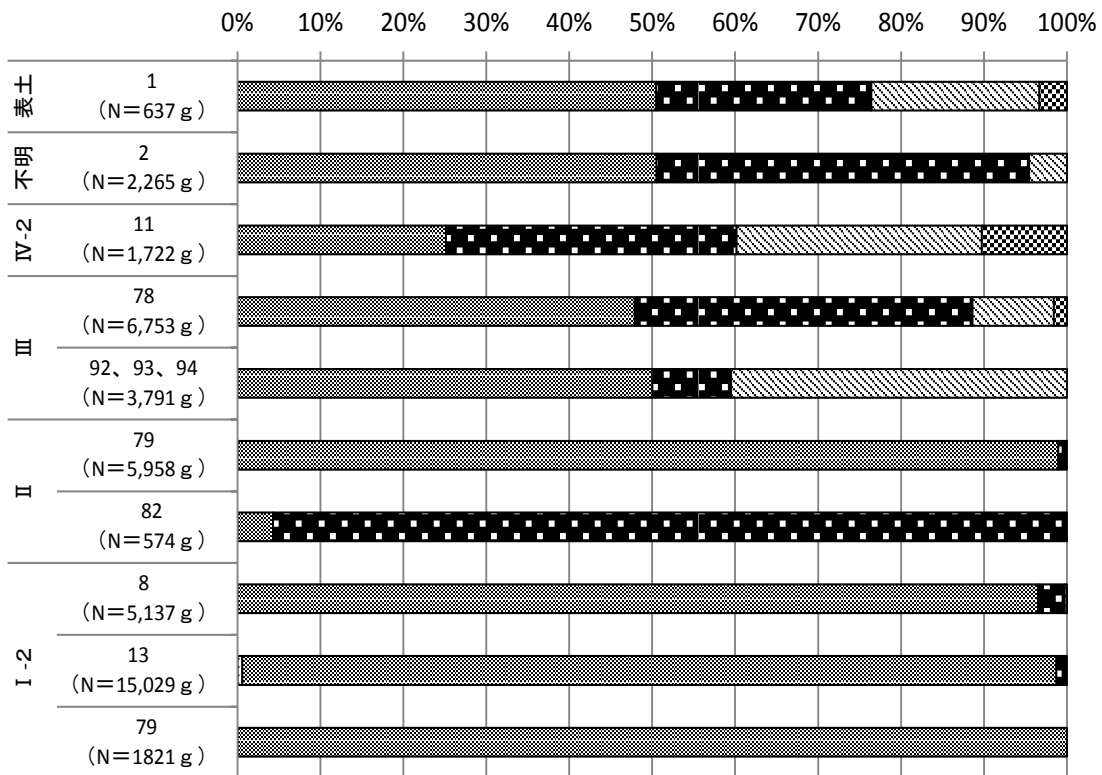
後期中葉～後葉の貝層。加曾利B式～後期安行式期が主体。地点によって主体となる時期が分かれる。調査範囲の中央付近から緩斜面側に向かって堆積し、北東側の端部の谷頭付近に比較的堆積範囲の広い純貝層が形成される。

IV－1段階 後期後葉～晩期前葉

① トレンチ



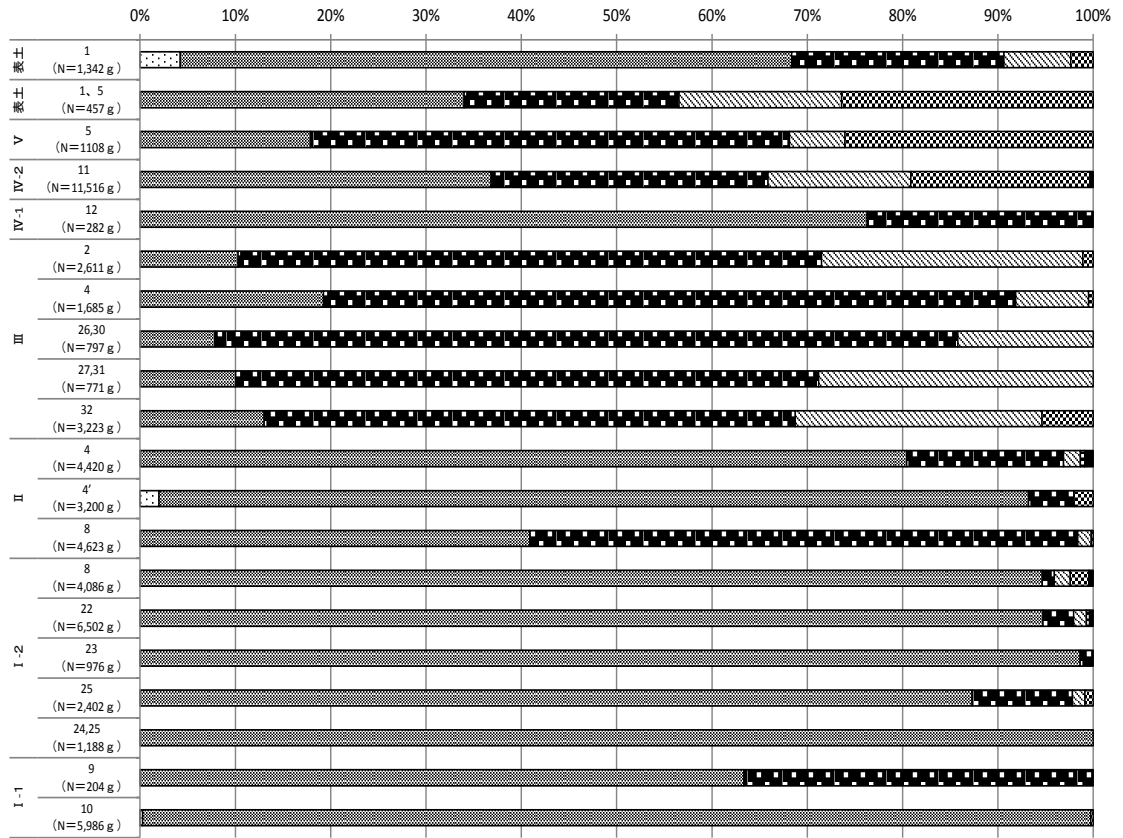
② トレンチ



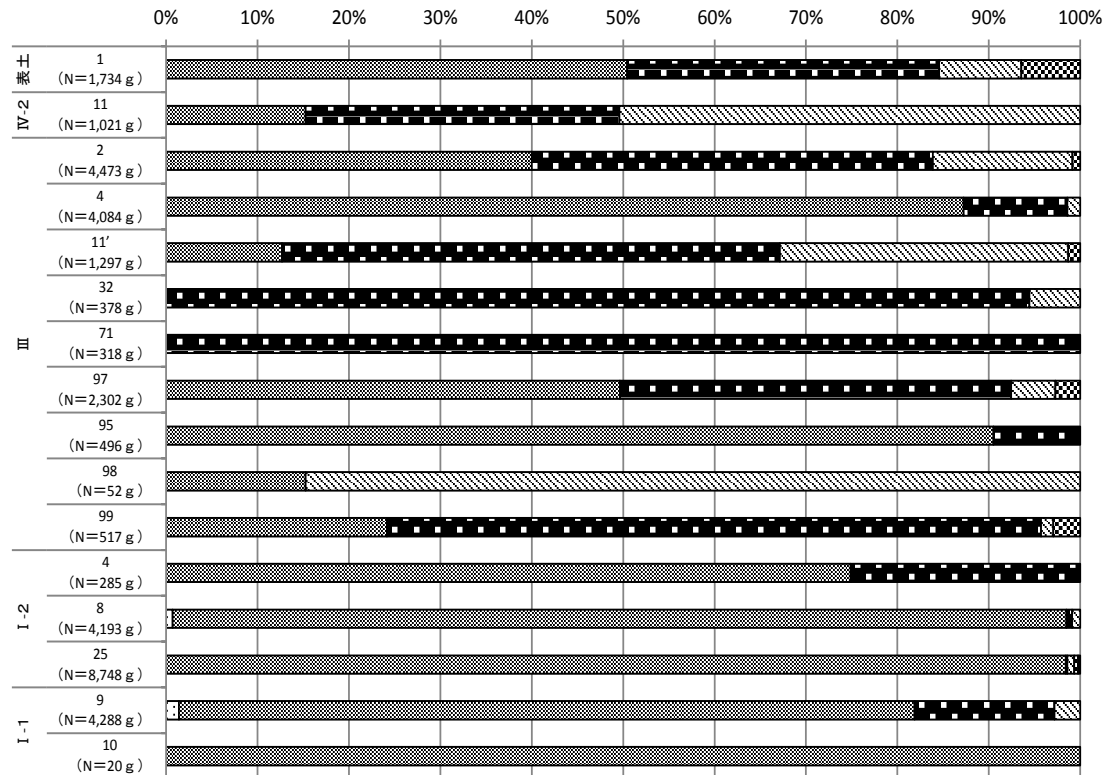
中期末～後期初頭
 後期前葉
 後期中葉
 後期後葉
 晩期前葉
 晩期中葉

第13図 第1次調査段階別出土土器重量比 (1)

③ トレンチ



④ トレンチ

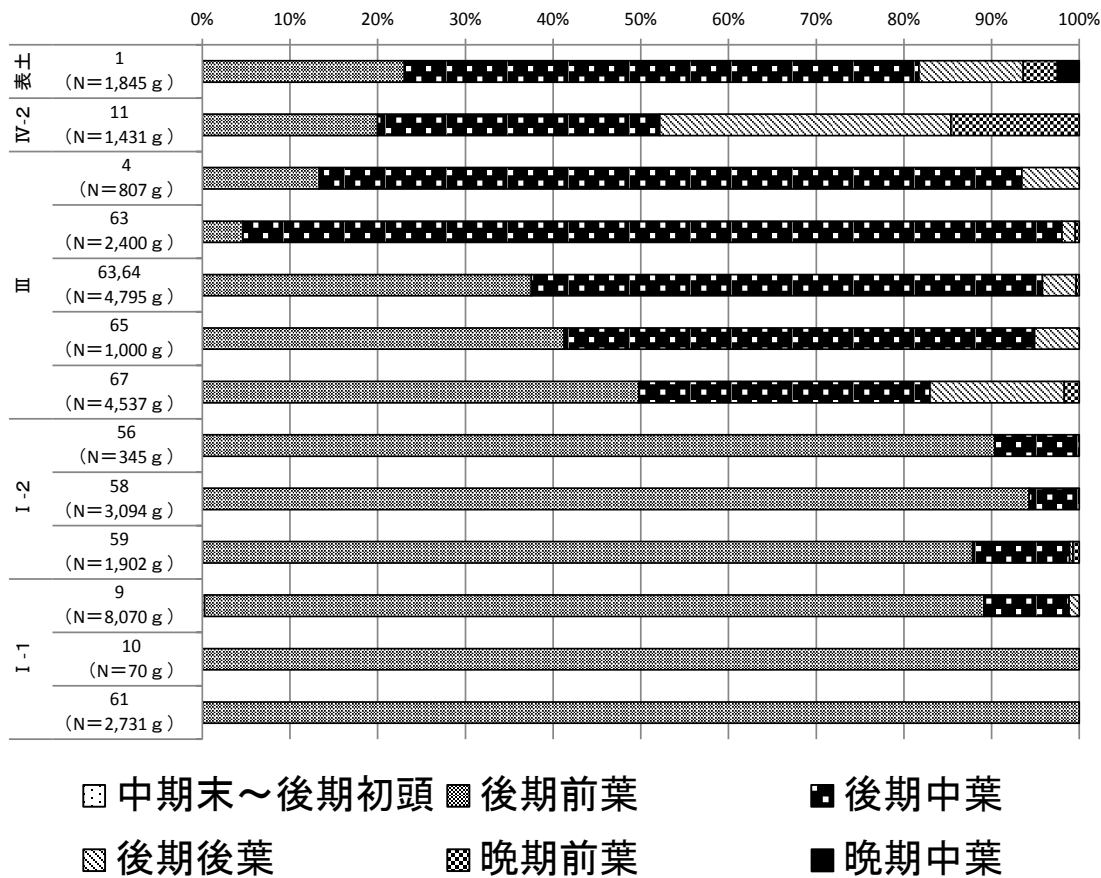


中期末～後期初頭
 後期前葉
 後期中葉

後期後葉
 晚期前葉
 晚期中葉

第14図 第1次調査段階別出土土器重量比 (2)

⑤ トレンチ



第15図 第1次調査段階別出土土器重量比 (3)

後期前葉～後葉の遺物を包含する土層。淡黒色～褐色を呈し、IV-2段階の下部に堆積する。堀之内1式～安行3b式の土器が出土するが、古い時期の土器の出土量が多い傾向にある。ただし、遺存状況の良好な資料は晚期前葉となる。

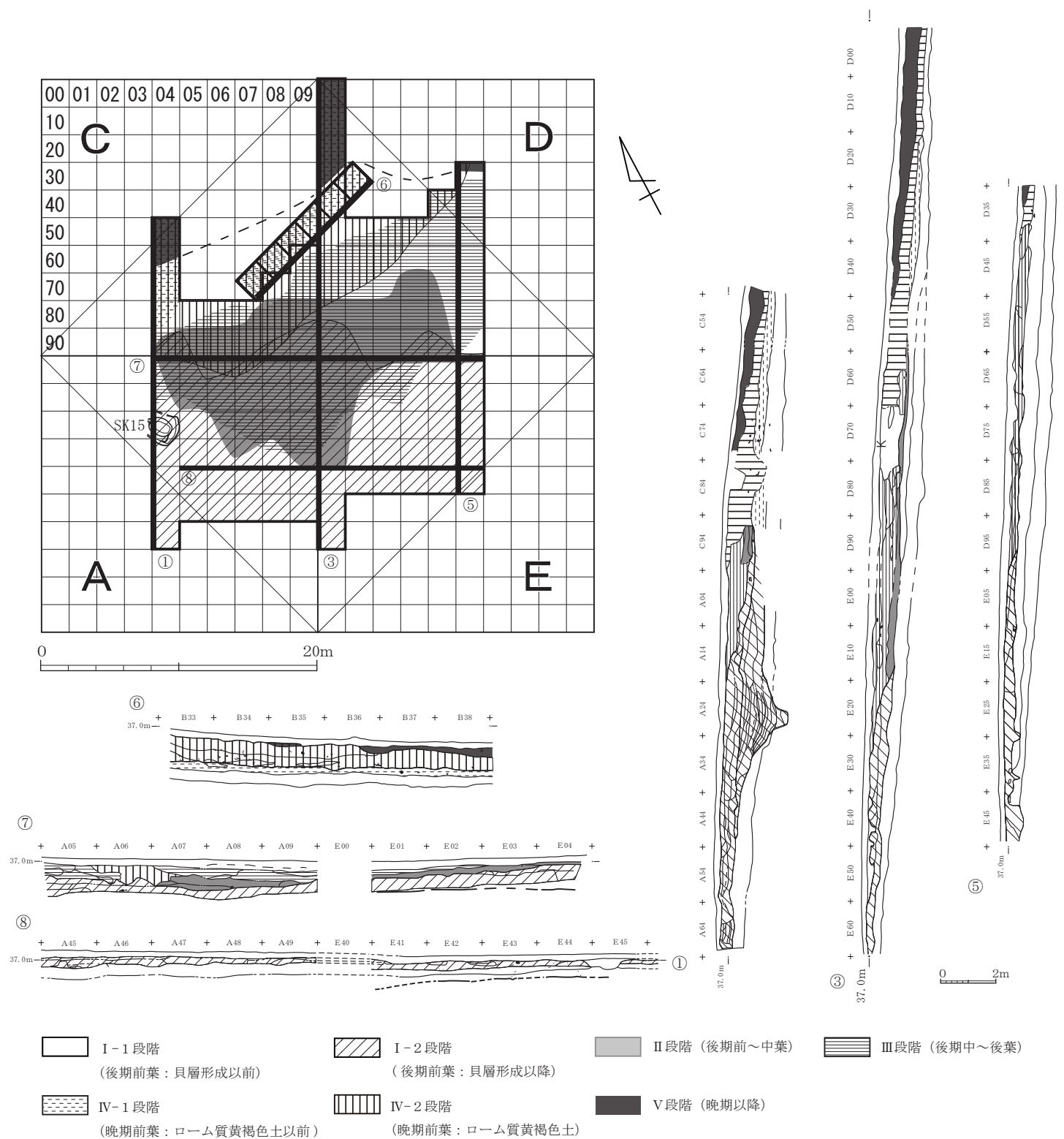
IV-2段階 晚期前葉

堀之内1式～前浦式土器を包含するローム質黄褐色土層。斜面側にいくほど晩期の遺物が多くなる。緩斜面に堆積する。

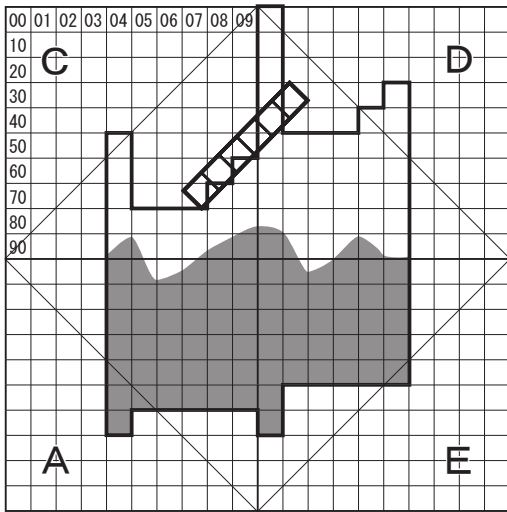
V段階 晩期以降

ローム質黄褐色土を被覆する黒色土層。後期前葉から晚期前葉までの土器を含むが、後期中葉以降の土器の出土量が多くなる。

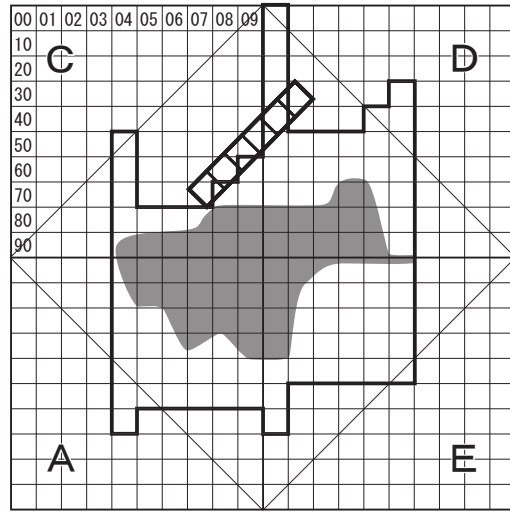
これらの段階別の土層及び貝層の平面及び断面分布を示したものが第16・17図である。まず、第16図の①、③、⑤セクション図をみると、I-1段階の土層は調査範囲全体に堆積していることがわかる。さらに、I-2段階以降、調査範囲南側の中央窪地側から北側の緩斜面に向かって斜面に沿って順に堆積している状況がみて取れる。次に、第17図の平面分布図をみると、I-2段階は調査範囲南側の大部分に分布するのに対し、II段階は調査範囲の中央部分を中心にやや東西方向に帯状に分布する傾向にある。III段階以降になると調査範囲の北側に移動し、さらに東西方向に帯状に分布するようになる。これは北側から入り込む浅い谷の傾斜に沿って分布していることを示している。IV段階以降になると、分布がさらに調査範囲の北側へ移動することとなる。(続き 49 ページへ)



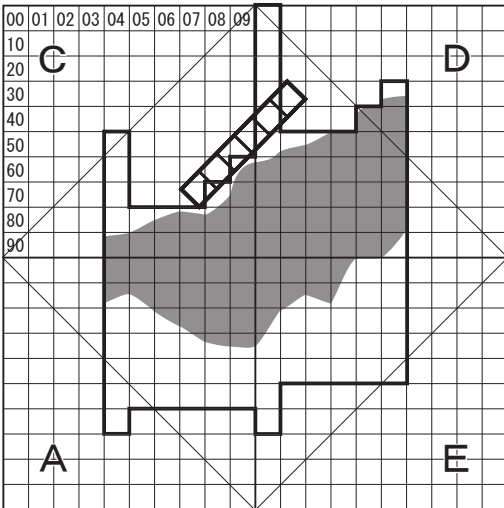
第16図 第1次調査段階別平面図及び断面図



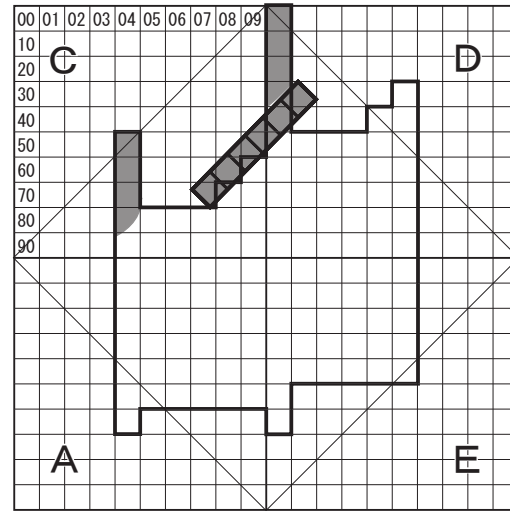
I-2 段階



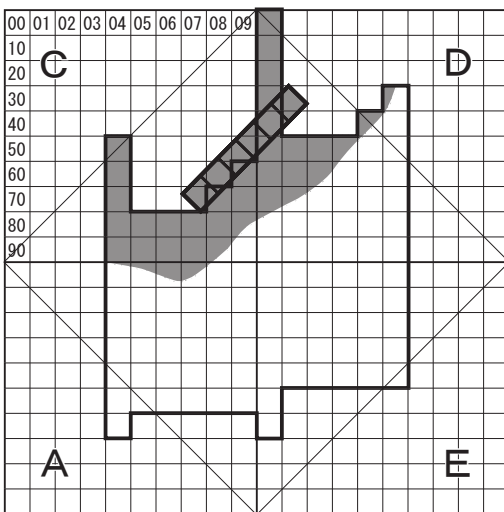
II 段階



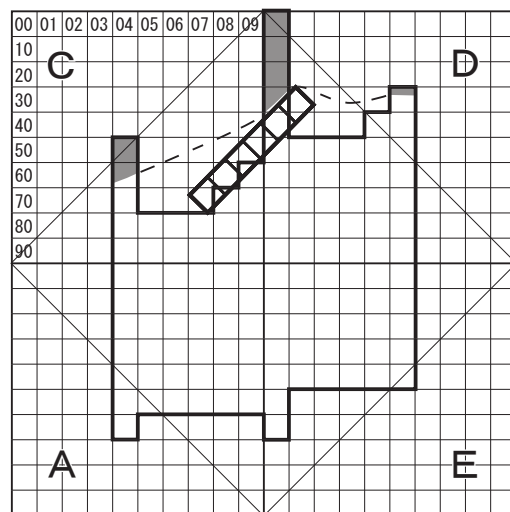
III 段階



IV-1 段階



IV-2 段階



V 段階

第17図 第1次調査段階別貝層及び土層平面分布